**22．5.22．復活節第６主日**

**「 試みに打ち勝つ力 」**

**みなさん、おはようございます。5月も後半に入り、つつじの花が大阪市内のあちこちで一斉に咲いており、見頃を迎えています。奈良・葛城山では、先週に見頃のピークを過ぎたものの、新緑の山肌に一目１００万本のつつじの花が咲き誇り、緑と赤のコントラストが登山客など、見る人々の目を楽しませているとのことであります。教会中庭の額あじさいも、白にうっすらと紫色の入った可憐な花を咲かせており、梅雨の気配を感じる時分となりました。教会のカレンダーでは、今週の26日(木)に主の昇天日を迎え、2週間後の日曜日には、聖霊降臨日(ペンテコステ)を迎えようとしています。主がよみがえられた日から40日目に、復活の主イエスは弟子たちとともにオリーブ山へと登られ、そこで彼らに向かって大宣教命令とも言える言葉を告げられました。「全世界に出て行って、造られた全ての者に福音をの宣べ伝えよ」(マタイ２８：１９)と、弟子たちの心を鼓舞し、「見よ、私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と告げられ、天高く昇ってゆかれました。私たちも主から託された宣教の使命を心に留めながら、よみがえりの主を証ししてゆきたいと思います。**

**さて、今月の８日からマルコによる福音書１４章に入っていますが、べタニアのマリアによるナルドの香油の油注ぎ、１２弟子の一人であるイスカリオテ・ユダによる裏切りの場面について見ました。本日の２２節からは、いわゆる「最後の晩餐」の様子について描かれた場面となります。四国・徳島にある大塚国際美術館には、世界的な名画が原寸大のサイズで、陶板(陶器の大きな板)に転写された作品が観覧できるということで、行かれた方も多いのではと思いますが、私も西宮時代に何度か足を運んだことがあります。その多くの作品の中に、ルネッサンス期にレオナルド・ダ・ヴィンチによって描かれた実物大の『最後の晩餐』の陶板画が展示されているのですが、展示室の左右両側に修復前と修復後の２つの同じ作品が飾られていました。「この中に私を裏切ろうとしている者がいる」と、主イエスが言われた直後の弟子たちの様子が描写されているとも言われていますが、修復後の『最後の晩餐』を見ると、主イエスを裏切ったユダが握りしめている銀貨の入った袋が、よりはっきり分かるとも言われています。陶板画とは言っても、何度目にしても、約5２0年も大昔に描かれた名画の歴史の息づかいと、オーラを感じ取れる空間であったことを覚えています。**

**約２０００年前にもたれた過越の食事(最後の晩餐)では、実際の所、主イエスが会食の席の真ん中に座っておられたのかどうかは分かりませんが、主イエスはご自分を裏切る者について告げた後、おもむろにテーブルの上のパンを取り、それを裂き、また、杯を取って弟子たちに分け与えられました。主イエスがここで「取って食べなさい。これはわたしの体です」(２２節)と言われたのは、目前に迫っている十字架の死を念頭において、十字架上で裂かれるご自分の肉体を表して、そのように言われたのでありました。また、主イエスは続いてぶどう酒の杯を手に取り、神様に感謝の祈りをささげてから、弟子たちにそれを分け与えられました。「…彼らは皆、その杯から飲んだ。」(23節)と書かれているので、同じ杯を一口ずつ口にして、弟子たちが同じ杯からぶどう酒を飲んだということになります。つい私たちは約２０００年前の出来事と、コロナ禍にある現在の生活様式とを比べて、今だったらありえないと思ってしまいますが、主イエスは「これは、わたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。」(24節)と言われました。主イエスがここで「契約の血である」と告げられたのは、十字架の上で流される血が、人類の救いのために流されるものであり、旧約時代の古い契約に取って代わる新しい契約であることを表していました。古い契約というのは、旧約聖書の時代、神様が人間と結ばれた契約のしるしとして、雄羊などの動物がいけにえとして神にささげられ、その流された血が祭壇とイスラエルの民に注ぎかけられるということがありました(出エジプト記２４：３～８)。現代の私たちから見るならば、何と血生臭い宗教的な儀式であると思いますが、神様がいにしえの契約において、血を用いられたというのは、罪深い人間を贖うためには、罪のない清い命が必要であるということを表していました。**

**主イエスが「これは、新しい契約の血である」と告げられたのは、罪ある私たちの身代わりとなって、自ら十字架の死を甘んじて受けられ、ご自身の血潮によって結ばれる新しい契約であることを表していました。**

**よって、その象徴であるぶどうの酒を口にするということは、主イエスによる新しい契約の血を信じて受け入れることを意味していました。また、主イエスはこの地上において弟子たちと食事を共にするのは、今日この時が最後であることを告げられ「…神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」(25節)と言われました。つまり、主は今度、あなたがたと食事を共にする時というのは、私が再びあなたがたを迎えに来たその時であり、弟子たちが天の御国において、主と共に食事をする時であることを告げられました。現在のキリスト教会では、2年以上に渡るこのコロナ禍にあって、各個教会によって行われる回数は異なりますが、感染予防対策を講じ、細心の注意を払いながら聖餐式を執り行っています。それは私たちがこの最後の晩餐での主イエスと弟子たちとの間で結ばれた新しい契約を想い起こし、それを記念して守り行うものであります。主イエスと彼を主と信じ告白する私たちとの間に、キリストの血による新たな契約が結ばれていることを毎回想い起して、その信仰を告白するものであります。私たちは聖餐式にあずかる度に、その都度、主の救いに招き入れられた一人一人であることを覚え、感謝し、終わりの時まで主の救いを証し、福音を宣べ伝えて参りたいと思います。**

**さて、続く27節以降３１節まで、主イエスが弟子たちに向かって、「今晩、あなたがたは私のゆえにつまずくであろう」と告げられた場面が述べられています。弟子たちは最後の晩餐を終えた後、主イエスとともに賛美の歌を歌いながら、オリーブ山へと出かけ、その道すがら、「あなたがたは皆、わたしにつまずく…」(27節)と言われました。主イエスは旧約のゼカリヤ書13章7節のみ言葉を引用されて、羊飼いがいなくなると、羊が散り散りばらばらになるように、あなたがたはこの後、私から離れてゆくであろうと言われました。けれども、主イエスは十字架の死を成し遂げた後、死後3日目によみがえり、あなたがたよりも一足早くガリラヤへ行き、そこであなたがたを待っていると、言われました。主イエスの十字架の死と復活の予告に関しては、過去に3度、耳にしたことがあるにしても、「今晩、自分たちが師である主イエスを見捨てて逃げ去る」との言葉を耳にした弟子たちの胸中は、かなり動揺していたのだと思います。血の気の多いペトロは、即座に血が上ってしまったのか？「たとえ他のみんながつまずいたにしても、私はあなたにつまずく、などと言ったことは決してありません」と断言しました。けれども主イエスは、興奮する彼に向かって「あなたは、きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うだろう。」(30節)と言われました。数か月後や1年後であるならば未だしも、今日今夜と言われたリーダー格である彼のメンツは丸つぶれであり、ペテロの性格上、ますますいきり立ったのだと想像します。ペトロは激しく反論し、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」と言い、他の仲間たちも同じように言いました。人間的に見るならば、たとい嘘であっても、「私のために、そこまで言ってくれるのか！」と心強い気持ちになれるものでありますが、主は全ての事をご存じであり、事実は彼らの言葉とは真逆な方向に展開することになります。わずか数時間の後に、弟子たちは自分たちの命欲しさに雲隠れをし、ペトロも3度、主を否み、男泣きするのであります。弟子たちは師である主イエスの命が危ぶまれる最大の危機に直面して、「俺たちは、あなたを最後の最後まで命懸けで守りますよ」と言いながら、その実、事が起きた時には、一目散に逃げだすという、大変情けない醜態をさらしてしまうのであります。ペトロも主の前で誓った言葉は、彼の本心であるとは言え、その意思を最後まで貫き通すことは出来ませんでした。**

**私たちが本日のこの、主イエスによる「弟子たちがつまずく」との予告から学び取る教訓というのは、人がどれだけ自分の力のみに信頼し、過信したところで、事態が良い方向に好転するとは限らないということであります。私たちの長い人生の道程において、危機的な状況に直面した時、すぐにあきらめることなく、最後まで粘り強く、果敢に挑むことも大切な事でありますが、一方で、謙虚に自分自身の限界を悟り、神様に全てをお委ねして生きることが肝要であることを教えてくれていると思います。主の復活の出来事の後、回心をして伝道者となった使徒パウロも次のように証ししています。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(Ⅰコリント１０：１３)と語っています。主はやがて、この欠けと弱さの多いペトロを大いに用いられ、「…わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」(マタイ１６：１８)とのお言葉通り、彼を通して初代教会の礎を築いてゆかれるのであります。**

**私たちは現在、復活節の後半の時期を迎え、2週間後にはペンテコステを迎えようとしています。主イエスが弟子たちに向かって語られた言葉、「わたしは父に、もう一人の助け手を送っていただくようお願いします。**

**その助け手は、いつもあなたがたと共におられます。…わたしはあなたがたを捨てて孤児にはしません。」(ヨハネ１４：１６～１８)との確かな約束を胸に、神の霊とその導きを求めながら、この時を歩んでゆきたいと思います。助け主なる聖霊が、主を信じる者たち一人一人の力の源であったことを覚え、祈りつつこの時を過ごしたいと思います。**